

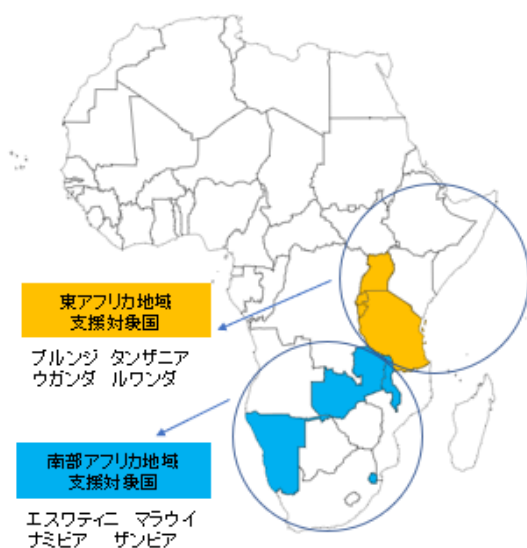
産休サンキュープロジェクト・ニュースレター

産休サンキュープロジェクトは10周年を迎えました！

平成25年（2013年）に開始してから今年で10年、ご賛同いただいた企業様からのご寄付で、アフリカ地域で最も支援を必要とする子どもたちやご家族の健やかな生活を支援してきました。本プロジェクトは、企業の社会貢献の一環として、社員の家族で生まれた人数と同人数のアフリカの赤ちゃんを支援する取り組みから始まり、現在では6社の企業様からごの協力をいただいております。支援総額は17,027,081となりました。改めて、ご支援いただいている皆さまに心からお礼を申し上げます。ありがとうございます！

令和5年度は、東アフリカと南部アフリカの8カ国を支援

東アフリカ4カ国、ブルンジ、タンザニア、ウガンダ、ルワンダで、南部アフリカ4カ国、エスワティニ、マラウイ、ナミビア、ザンビア、計8カ国で支援を行っています。コロナ危機は、アフリカにおいても誰も想像しなかったような影響をもたらしました。さらに、気候変動による干魃や豪雨、農作物の不作、ウクライナ危機をきっかけとする食糧価格の高騰により、アフリカに暮らす人びとの日常生活はこれまで以上に厳しいものになっています。今回のニュースレターでは、そんな中で逞しく生きるアフリカの人たちからのメッセージをお届けします。



ザンビア エイズ孤児の就学支援

エイズで両親を亡くしたジュダさん、祖母と暮らしています。生活が苦しく、学校へ通うための制服や靴、学用品を購入することができずにいました。プロジェクトから必要な物資の提供を受け、学校へ行くことが可能になりました。

(写真提供：ザンビア赤十字社)



ブルンジ 貧困者への物品支援

ブルンジの農村では、現金収入が限られています。赤十字ボランティアは活動の一つとして、村の貧しい人びとへ物品支援をしています。そのための資金調達が大きな課題です。そこで皆で話し合い、村の地主の農作業を手伝うことで現金を得ることになりました。ボランティア94人が集まって、労働に従事し、1人一日当たり120円の収入を得て、貧しい人びとを支援する資金を捻出できました。



「農作業を手伝うことで得た収入から、村の貧しい人びとへ物資を提供することができました」と話してくれたのは、ボランティアグループのアイザックさん。(写真上)(写真提供：ブルンジ赤十字社)



ウガンダ 感染症予防啓発

赤十字ボランティアのオケロさんは、村の「コロナ特別委員会」のメンバーとして、コロナ感染症について研修を受けました。研修の後、オケロさんは村の集会で、人びとにワクチンの重要性について話しました。「村の人びとはコロナに慣れてしまったので、ワクチンの効果を理解してもらうのに苦労しました。人びとの中には、ワクチンに賛成する人もいましたが、反対する人も多くいました。それでも、139人の人がワクチンを受けてくれました。コロナはなくなったわけではないので、これからも村の人びとが予防のための行動を選択できるよう、啓発活動を続けたいと思います。」

木陰で休憩する人びとに拡声器を使ってコロナ感染症対策やワクチンについて説明をするオケロさん。(写真提供：ウガンダ赤十字社)



マラウイ HIV感染者支援



(写真提供：マラウイ赤十字社)

赤十字社のボランティア指導者として活動しているフランケンさんは村のHIV感染者やエイズ患者の家庭訪問をしています。「以前はHIV感染者やエイズ患者は偏見や差別のゆえに孤独でしたが、プロジェクトのおかげで今は普通の人と同様の生活ができるようになりました。プロジェクトから提供された種子や肥料で、作物も作っています。」

ナミビア HIV感染者支援



赤十字ボランティアとなったエドモンドさん(写真提供：ナミビア赤十字社)

「HIVに感染していることが分かったとき、事実を受け止められず、自殺を図りました。本当に地獄でした。けれども、家族や赤十字社のボランティアの支えで、治療薬の服用を開始し、自宅で前向きに暮らすことができるようになりました。今は自分も赤十字のボランティアになり、同じような状況にある人を支援しています。」

エスワティニ HIV感染者支援

「もうすぐクリスマスというとき、家には食物がなく、何を作って子どもたちとお祝いしたらよいのか途方に暮れていました。その時、赤十字が、豆、米、油などの食料を供与してくれました。赤十字に感謝しています。」(ルケレさん)

(写真提供：エスワティニ赤十字社)



あばばいえい通信 日赤ルワンダ現地代表部首席代表の吉田拓がお届けします!

危機にあるのは食料ではなく、弱者への想像力



©国際赤十字・赤新月社連盟

顧みられない人びと

この30年間で世界のGDPは4倍に成長し、貧困人口は急速に減少しました。その一方で最低限の栄養、医療、水にアクセスできない人びとは、サハラ以南のアフリカ地域、紛争地域、農村地域に集中し、この地域では貧困人口の減少ペースが非常に遅いことが懸念されています。人類がより便利、より安くを追求して経済成長を進めた結果、



©国際赤十字・赤新月社連盟

いつでもどこでもなんでも携帯電話で見られる世の中になりました。

その一方で、もともと姿を見られず、聴かれる声を発せない

人びとは、ますます顧みられなくなってきていることを実感します。

昨年9月、食料危機が発生しているケニアのマルサビットで、ケニア赤十字の食料配布に同行しました。マルサビットは、立木がちらほらと立つだけの乾いた砂漠地帯の集落で、当日は40度を超す炎天下でした。受益者の人びとは平均で10キロ遠くからきていました。多くが女性で、みな家にある一番いい衣装を華やかに着飾ってきています。配布した食料は、マメ、コメ、食用油、塩など、1世帯7キロくらいです。みな、食料を受け取ったらそれぞれ背負い、帰路に着きます。これは逆を言うと、7キロの荷物を背負って10キロ歩ける人が家族にいないと、食料を取りにこられない、ということです。

帰り道の若い女性にお話を聞くと、家には6人の子供と夫が待っており、お腹を空かしているといいます。配布した食料は2日くらいでなくなると言います。

彼女は暗い顔をして、食べ物がない、水もなく、持っていた家畜が死んだ、次は人が死ぬ番、と消え入りそうな声で呟きました。鮮やかな衣装と抜けるような青空の下、彼女の心細そうな顔を通して、薄暗い家で空腹に耐えて母親を待つ子どもたちの姿が透けて見えた気がしました。

話を聞きながら、お腹を空かしている子どもが自分だったかもしれない、

重い食料を背負って10キロ歩いて帰る母親が自分だったかも知れないと慄然とします。日本に生まれた自分と、ケニアで苦しむ彼女を隔てたのは、努力や実力ではなくて、単なる偶然だったはずだ、と。

食料危機は、単に食べ物が無い、という問題ではなく、遥か遠くの弱者を思いやる想像力と行動力を試されている、人類への試練です。皆さんの尊い一歩を通し、日々、便利になっていく私たちの世界で、見えず、聴かれることのない弱い立場にいる人々のことを想像し、一緒に助け合う世界を築いていきたいと思います。

編集後記：

ルワンダでは、プラスチック袋の使用と国外からの持ち込みが禁止されています。でも、ペットボトル飲用は販売され続けています。最近、政府主催の会議では、ペットボトルの水を配ることを止め、水を入れたガラス瓶を設置することが多くなっています。ルワンダ人の小さくても、できることから始めてみる姿勢には学ばされます。
(吉田拓、日赤ルワンダ現地代表部首席代表、キガリ在住)

皆様と共に歩んできた産休サンキューも第4期の終盤に差し掛かりました。母子の健康を守る目的でスタートした本プロジェクトも、時代の移り変わりによりその支援内容が少しずつ変わっています。感染症の流行、異常気象とさまざまな危機が日々新たに加わる中で、最も必要とする人々へ、いただいたご支援を届けてまいります。(八尋絵美、日赤本社国際部開発協力課)

たった今、同じ地球の上で、日本の私たちとこんなにも違う生活が、アフリカの各地で繰り広げられている、その事実を改めて気づかされました。アフリカの子どもたちやそのご家族の思いを受け止めた支援を心がけたいという思いを新たにしています。
(山岸信子、日赤本社国際部開発協力課)



- 日本赤十字社 国際部 開発協力課
産休サンキュープロジェクト担当
電話：03-3437-7089 E-mail: sankyuthankyou@jrc.or.jp

- [Yahoo!ネット募金](#)を通じたご寄付はこちらから

